〈論　文〉

My Mortal Enemy における対立要素と Myra の孤独

志　水　智　子

Abstract

In Willa Cather's *My Mortal Enemy* (1926), the author describes various opposite images such as poverty and wealth, single life and matrimony, Europe and America, Catholicism and Protestantism, love and hostility, and youth and age, through the heroine's life. As for these pairs of opposite notions, it can be thought that one notion sometimes is the root of the other. And the heroine's life can be explained by these opposite notion. Myra Henshawe, the heroine, desires a rich and happy life but feels lonely at last. This essay aims to explore the meaning of Myra's loneliness.

Myra prefers poor artistic friends to rich people with money, and kindly takes care of her young friends. However, she is satisfied with her friends only when she is richer and stronger than them. Moreover, she always wants to live in high society and desires to be richer. Although her husband has a steady job till her later years, she cannot be satisfied with her plain life and feels unhappy. Her ambition for money and a materialistic life prevents her from realizing a realistic life for her.

While Myra longs for her past life and feels unhappy, her husband, Oswald, can positively accept all his life and reality. His positive way of thinking makes Myra lonelier. Myra can neither make money by herself nor abandon her unrealistic ambition. Her loneliness symbolizes the weakness of the people like her.

序

Willa Cather の *My Mortal Enemy* (1926) は、その出版前後の作品であ

る *The Professor's House* (1925) や、*Death Comes for the Archbishop* (1927) に比べて格段に短く、人物描写について完成度の低い作品であると批評されることもある。例えば Louis Kronenberger は、"The book implies much, but connotes little. That is its weakness, and it is a serious one." (229) と述べ、"*My Mortal Enemy* is perhaps Miss Cather's least important book." (229) と低く評価している。確かに作品のヒロインである Myra Henshawe の人物像は、十五歳で登場する Nellie Birdseye が限られた期間にとらえたものであり、語り手の洞察力や Myra との密着度にも限界があるとは言える。しかし、この作品では、Myra の人生を通して、貧富、未婚と結婚、ヨーロッパ文化とアメリカ文化、カトリックとプロテスタント、愛情と敵意、御伽噺と現実、血縁の絆と他人との絆、若さと老い、といったさまざまな対立する概念が挙げ連ねられ、描かれている点で、作者の斬新な試みを読み取ることができる[1]。

作品にちりばめられる対立要素を検証してみると、それらが単に正反対の意味を持つ要素というだけではなく、一方が他方の要素を生じさせる根源的要素となる場合があることが分かる。本稿では、さまざまな対立要素に囲まれ、惑わされる、Myra の孤独の意味を、彼女の性質と人間関係、作品に描かれる階級、彼女が関心を寄せるものが持つ象徴性といった点から考察していきたい。

I Myra の人間関係が招く孤独

Nellie が Myra に関心を抱いた原因は、叔母から Myra のドラマチックな恋愛と駆け落ち結婚のエピソードを聞き、それらを "brilliant and attractive" (3)[2] であると思ったことにある。まず Myra が築く人間関係のあり方とそれゆえの孤独について考察したい。

娘時代の Myra はイリノイ州のパースィア（Parthia）という町で裕福なアイルランド系のカトリック教徒である大叔父、John Driscoll の保護の下

にあったが、プロテスタントの息子である Oswald との結婚を反対され、大叔父の莫大な財産の相続を諦めることと引き換えに Oswald との結婚を選ぶ。

ところが Myra はその人生の最後の時期において Nellie に "I should have stayed with my uncle. It was money I needed. We've thrown our lives away." (75) と語り、かつての自分の人生の選択を全否定する結論に至っている。しかしもし Myra が大叔父の意向に従って財産を手に入れ、金銭についての不自由を知らなかったとすれば彼女には金銭の価値を認識する機会もない。経済的に何不自由ない時にはその生活をすべて投げ打ってでも Oswald との結婚を望み、それが手に入ると今度はより裕福な生活を切望して気持ちが落ち着かない Myra は、常に現状に満足できない性格なのである。財産と大叔父が反対する Oswald との結婚は、Myra にとって、いずれか一方しか選べない選択肢であるという意味で対立要素になる。この対立要素はそのいずれを選んだところでないものねだりをして欲求不満に陥る Myra の性質を示唆する。

また、Myra には Nellie が見たところ、"artistic people" (39) と "moneyed friends" (39) と表現される二種類の友人がいる。彼女はたびたび "rich and powerful" (40) な人々との付き合いにいらいらしている。生活維持のために必要な収入や仕事上の付き合いと、生活維持のために直接必要にはならない芸術的な趣味や交友というものは、対立要素である。また、経済力を持つことでより贅沢で高尚な趣味の余裕が得られると考えると、仕事によって収入を得ることは、芸術や趣味を愛好するための根源的要素である。このため、贅沢な生活や、金銭を稼ぐこととは対立要素である、芸術の楽しみを追求する Myra は、野心的で未来志向的ではある。しかし独力で財を成し、アメリカ社会でより質の高い暮らしを可能とする、根源的要素たる金銭を確保することの意味を、"It's better to be a stray dog in this world than a man without money." (15) とまで言い切り、確固とした金銭第一主義の信

念を持つ Driscoll 大叔父に比べ、Myra の未来に対する見通しは限界付けられ、揺らぎやすいものであることが読み取れる。

さらに Myra は他者の世話をすることを好むが、このことは彼女が慈愛に溢れる一面を持つというだけにとどまらない意味を備える。Myra は気に染まないビジネス上の友人たちには高圧的である。また、Oswald に嫉妬心から怒りをぶつける時には彼女の部屋に "poison" (52) が漂っているように Nellie には感じられる。ところが Myra は、若い俳優の Ewan Gray と Esther 嬢の恋を応援して Gray にアドバイスをすることを楽しみとするし、若くして結核をわずらう詩人 Anne Aylward を訪ねる際には思いやりに溢れる。このような彼女は Nellie の視点から "brilliant and strangely charming" (42) に見える。また彼女は、ホテルに滞在中の友人 Madame Modjeska に上等の緑木を送って喜ばせようとする。Myra は人間関係において、自分が相手を威圧するかもしくは保護する立場、つまり相手より物質的にも精神的にも優位な立場に立たなければ満足できない。このような立場を保つためには、Myra 自身の安定した経済力と、衰えることのない健康と若さが必要になるが、それらは現実には困難な条件であることが Part II において描かれるのである。Nellie が十年後に出会った Myra は若さと健康と経済力を失い、階上の住人の騒音に圧倒され、Oswald や Nellie に介護をされ保護される立場となることを強いられる。すると Myra にとっては他者との絆はもはや喜びをもたらしてはくれなくなるわけである。

Nellie が最も衝撃を受け、また謎と感じるのは、"Why must I die like this, alone with my mortal enemy? (95) という Myra 晩年の呟きである。この "enemy" の意味は本稿においても Myra の孤独を解釈する手がかりとなると考えられる[3]。Myra は愛する Oswald に対して穏やかな時は鳩のようにおとなしいが、嫉妬心や猜疑心を持つ時には蛇のように口をゆがめる。また、マチネで Nellie とともに目にした作家について、以前は友人であったゆえに関係が変化した後は許すことができないという考えを披露する。

Myra にとっては愛情や友情によって結ばれた絆が、何らかの諍いによって損なわれた場合、彼女はその絆を結んだはずの相手を、もともと「敵」である人以上に許すことができない。Myra にとって近い間柄の相手に対して抱かれる愛と憎しみというものは、一見対立要素のようでありながら実のところいつでも置き換わるものであり、また時には共存する要素と考えられる。付き合いがほとんどない相手や無関心な相手とは当然人間関係の絆は成立しない。そして愛する相手に対してはいつその愛情が裏切られ憎しみに置き換わるか分からないという可能性が付きまとう。このように Myra にとって人間の絆は、密接であってもなくても彼女にむなしさと孤独を強いるものとなるのである。

Ⅱ　Myra の階級意識が招く孤独

Myra の機嫌が左右される原因の一つは、彼女が自分と他者との経済的、階級的格差を意識する時である。また、Myra の幸福感を左右するのは、当時のアメリカ社会において彼女が自分をどのような階級に属すると認識しているのかという問題である。そこで次に、Myra の階級意識とそれゆえの彼女が抱く不満について考察する。

Myra は少女時代を中西部イリノイ州の町で過ごし、Oswald と結婚してからはニューヨークで、晩年には西海岸近くの町の安いアパートで暮らす。Myra が住み、また移住する土地は、彼女に他者との経済的格差を意識させる役割を果たす[4]。Myra が大叔父の家に住んでいた時には、彼女の家の裕福さは周囲に抜きん出ている。Myra は宝石であれスタンウェイのピアノであれ何でも持っていた。Myra はその人生の原点において揺るがない経済力を前提とする生活や特権階級の目線を身につけてしまったと言え、このことが後の彼女の人生における目測の誤りと不満を生み出すのである。

駆け落ちをした Myra と Oswald が住むニューヨークを含むアメリカ北部の都市は、閉鎖的な中西部以上にアメリカの富や発展を象徴する場所であ

る。少女時代を過ごしたパースィアの町では絶対的な上流階級であった Myra は、ニューヨークにおいて相対的に自分たち夫婦の経済力と階級を見せ付けられる経験をし、初めて自分が手に入れられるものとそうでないものを知るのである。ニューヨークは Myra の物欲をあおり、それが満たされない空しさをもたらす場所として機能している。

晩年の Myra と Oswald は西海岸の町を移動しながら生活する。こういった場所においては、ニューヨークよりも贅沢を追求したくなるような誘惑は少なく、生活費もよりかからないが、彼等の生活レベルは Oswald の賃金の少なさゆえに明らかに周囲の人々よりも低い。彼等が最終的に移り住んだ安いアパートでは、騒音を立てる階上の住人よりも、自分たちの経済力が劣るために騒音をやめさせる力がないという現実に、Myra は打ちひしがれる。当時の開発途上の西部の町もまた、北部の中心都市と対比され、主流社会から周縁化された Myra の境遇を象徴する場所として機能している。

西部のアパートで偶然に Myra 夫妻に再会した Nellie は大学教育を受け、自ら金銭を稼いで生計を立て、家族の生計をも助けることができる生活能力を身につけている。作品中でただ一度だけ登場する年号は Oswald が恋人時代の Myra にハイネの詩集を送った年である1876年である。そのころ青春時代を過ごした叔母 Lydia や Myra の学歴や職業といったものが語られることもなければ存在もせず、その結婚と妻としての生活だけに焦点が当てられることから、当時の中産階級の女性に対してビクトリア朝的な女性の役割が想定されたことが読み取れる。これに対し1911年頃に二十代半ばを迎えている Nellie は、未婚で学歴と職業を持ち一人暮らしをすることが不自然とはいえない世代に属する[5]。

Nellie の職業を聞いた Myra は “No, I can’t bear teaching for you, Nellie. Why not journalism?” (64) と言い、他人のためにエネルギーを注ぐ教職を嫌い、ジャーナリストを好む気持ちを表明している。このように収入源となる職業を持つということそのものにではなく、職種への好みに意識が向いて

しまうことは Myra の生活力のなさを表す。

Myra の夫 Oswald も職業を持つ。鉄道会社への勤務という彼の職業は安定し、また慎ましやかである。十年後、Nellie と再会した Oswald は Myra の看病ができるような勤務時間でさらに小さな会社で生真面目に勤めている。しかし Myra のほうは、ニューヨークにいる時も西海岸の町にいる時も変わることなく金がないことを嘆く。特権階級の暮らしや上昇志向を意識するあまり、Myra は現実の職業がもたらす安定性を評価する能力を欠き、幸福感を持てないのである。

Ⅲ　Myra を取り巻く対立要素の象徴性

Myra が経験するさまざまな対立要素はときにロマンティシズムの文学を思わせるような象徴性を備えている[6]。Myra が最終的にたどり着いた人生観や Nellie にとって謎の言葉の意味を、Myra が経験した対立要素の象徴性を読み解くことで検証したい。

まず、人は血縁関係の中で生まれ育ち、成長して後、結婚により他者との絆を結ぶと考えると、未婚期における血縁の絆がやがて結婚の絆を生み出す根源的要素と考えられる。晩年の Myra は若い時に Oswald との結婚の絆を選ばずに、大叔父との血縁の絆を保つにとどまるべきであったと後悔する。彼女には Oswald が自分の幼少期からのカトリック信仰を捨てさせたという思い込みもある。金銭第一主義の大叔父と自分が似ていることを認める Myra は、せめて戻ることができるものとして大叔父との血縁の絆を象徴するカトリックへと回帰したいと思うのである。

この作品においてカトリックは、*Death Comes for the Archbishop* におけるカトリック司祭らの質素で苦難の多い生活とは対照的に、Driscoll の豪華で贅沢な葬儀の様子によって象徴される。それは多くのアメリカ人が信奉するプロテスタントの簡素で質素な式とは違うステイタスを主張する手段とも言える。Cather はカトリックに対する批判の強い時代の風潮を感じていた

が、そのようなカトリックに Myra を結び付けることで Myra の周囲から理解されにくい価値観や自己主張を示唆する効果をあげていると言える。

大叔父との絆やカトリック、そしてヨーロッパ文化への Myra の傾倒は、彼女の人となりを生んだルーツである根源的要素に回帰しようとする欲求を意味する。つまり、若さと健康、経済力を失った Myra は、他者に対する優位性を備えていた娘時代の環境に帰りたい欲求に捕らわれる。すると Myra にとってカトリックは、彼女の他者に対する優位性への回帰願望をも象徴すると考えられる。

また、Myra は文学においてはハイネやシェイクスピアを好み、アメリカをたたえる詩人ホイットマンは好まない。音楽については、彼女がシチリア出身のベルリーニのオペラ『ノルマ』のアリアに心酔する様子が描かれる。このように Myra はアメリカ文化よりもヨーロッパ文化を好み親しんでいると言える。新世界アメリカにやって来た移民のルーツという観点から考えると、新世界アメリカと旧世界ヨーロッパという対立要素については、ヨーロッパの方が根源的要素となる。Myra の意識は自分のルーツであり根源的要素であるヨーロッパ文化とカトリックに向かい、彼女が生きる場であり現実であるアメリカを表象するものには向いていない。根源的要素に関心を寄せる Myra の態度は、過去志向であると同時に彼女の自己分析の深まりを意味している[7]。

Myra が好んだヨーロッパの音楽や文学も彼女の運命を象徴する。Part I でニューヨークに住んでいる Myra は、大晦日の日に彼女が交流を持つ芸術家や役者たちを自宅に招く。その客の一人である Emelia が歌う、オペラ『ノルマ』のアリアを聴きながら、Nellie はノルマの物語が Myra の人生と重なるように感じる。『ノルマ』ではヒロインのドルイド教徒の長の娘で巫女であるノルマは、恋人に裏切られた嘆きや、人々を率いる主導者としての責任感、母としての悲哀を併せ持つ。またノルマは愛した人々を後に残して火刑台に向かうというヒロイックで壮絶な最期を迎える。これらのノルマの

属性は、Myra の持つ女性性や、相手を保護したり威圧したりする母性や支配欲と重なり合う[8]。

また、十年後に Nellie が再会した Myra は、かつて Oswald から贈られたハイネの詩集を朗読してくれるよう Nellie に頼む。また自身もシェイクスピアの『リチャード二世』や『ジョン王』を繰り返し読み、気に入った節を暗唱する。そして Nellie とともに海岸近くをドライブ中、シェイクスピアの『リア王』に描かれているような断崖に着いた Myra はその場所を非常に気に入り、夜明けをその場所から見たいと言うのである。Myra の連想を誘ったその断崖は、『リア王』の中でリアの重臣グロスターが真実を見抜けないまま、庶子のたくらみに陥り、両目を失い、後悔に苦しみながらも勘当した嫡子のエドガーによって命を救われるドーバー沿いの崖に比せられている。グロスターが身を投げようとしたその崖は、人間の虚栄心と猜疑心のおろかさ、そして、その罪が救われる可能性を象徴する。Myra はこのような象徴性を帯びた場所を最期に選ぶ。

さらに、富や美の象徴としてよく登場するのが宝石類である。Myra と初めて会った Nellie が注目し、恐れを抱いたものが彼女のアメジストのネックレスである。これは Myra の死後、Oswald から Nellie に与えられる。しかし Nellie はその立派なネックレスを不吉なものだと思う。また、クリスマス前にニューヨークの Myra 宅を訪ねる Ewan Gray は恋する女性 Esther にオパールのブレスレットを贈ろうとしているが、彼に対して Myra は、オパールは美しいが不吉であり恐ろしいと言っている。そして彼女は Ewan の恋がおそらくうまくいかないであろうと予測しているのである。そして、Oswald が仕事先の若い女性からもらったトパーズのカフスボタンは十年後も彼が身につけている気に入りのアクセサリーである。だがそのトパーズは Myra の嫉妬心をあおり、夫婦の口論と彼女が一時的にピッツバーグへと家出する原因となっている。

このように登場する宝石であるアメジスト、オパール、トパーズはみな良

い意味を持たない。このことは、表面上の美しさや富が、現実の人間の幸福を生み出していないことを示唆すると考えられる。つまり Myra はたとえ経済的に豊かな状態であっても、更なる上昇志向や物欲に駆られて決して満足することも幸福感を得ることもできなかったであろうことが登場する宝石によって象徴される。

Ⅳ　Oswald と Nellie という他者

過去や対立要素を生み出す根源的要素への回帰願望に捕らわれる Myra と違い、すべての人生経験や現実を肯定的に受け止めることができるのが彼女の夫 Oswald である。二人は夫婦として同じ時間と現実を生きながら、人生の捉え方が全く違うという意味において、彼ら自身が対立要素となっている。Oswald はどのような環境においても満足し楽しみと幸福を見出す能力がある。Oswald は晩年期に西部の町でささやかな収入で忙しく妻を介護する日常にありながら、Nellie が耳にしたように鼻歌を歌いながら家事をこなし、妻に八つ当たりされても彼女を憎むこともなければ現状を嘆くこともない。Oswald は Myra の持つ資質の対立要素であり、彼女に最も近い場所にいながら、彼女のそれとは遠く離れた人生観に溢れることで、彼女を孤独にさせる存在でもある。

さらに、Myra と Oswald を対立要素と捉えた場合、Oswald を根源的要素と考えることができる。精神的な安定度の高い Oswald の幸福感がどんな時も揺るがないのに対し、Myra はしばしば Oswald の行いによって怒りや嫉妬心を掻き立てられ精神の安定を左右されるからである。すると Myra にとって Oswald は、孤独感をもたらす対立要素であると同時に、彼女の心の安定を激しく左右する根源的要素でもある。それゆえ Myra が Oswald を “enemy” と呼ぶ言葉は、Oswald を指すだけでなく、彼を根源的要素として存在する自らの幸福感の不安定性をも指すのである。

この作品の十一年前に出された、Jean Webster の *Dear Enemy* (1915) に

おいても後に配偶者となる男性を主人公が “enemy” と揶揄して呼ぶ趣向がとられている。この二つの作品で使われる “enemy” という言葉の重みの違いは、ビクトリア朝的な価値観に支配される時代、移民第一世代の大叔父から金銭の価値を伝えられた世代である Myra の人生観や幸福観と、大学教員となって赴任するのが1911年ごろと推定され、Webster の作品のヒロインと同世代と考えられる、大学教育を受け自ら社会活動にかかわる Nellie のそれとの差を象徴するかのようだ。女性の生き方という観点において、また既婚と未婚という意味において Myra と Nellie は対立要素であり、さらに時間の流れという観点において Myra 世代は Nellie 世代の根源的要素となる。根源的要素たる Myra の人生は Nellie にとって惹きつけられる対象であるが、それはあくまでも Nellie の人生にとって対立要素であり、Nellie はそれと自己同一化することはない。つまり Nellie の存在は Myra の孤独をさらに強調する。しかし Myra の人生を象徴するアメジストが世代を異にする Nellie に手渡され、彼女がそれを不吉なものと思いながらも持ち続ける場面で、対立要素に溢れる Myra の人生が、一つの融合体であり存在感のある固い結晶体とみなされる様子を描くことで、Cather は Myra のような迷える世代へのせめてもの鎮魂の意思を示しているとも考えられる。

結　　び

Cather の作品ではアメリカにおける開拓移民者の人生が描かれることが多いが、Myra は開拓者世代を大叔父に持つものの自らの社会的な地歩を築く開拓者ではない。Cather 文学の中での Myra の位置付けを考えてみると、Myra は、*O Pioneers!* (1913) の Alexandra や、*My Ántonia* (1918) における Ántonia のような、自力で地歩を築き成功をつかもうとする開拓者でもなければ、*Death Comes for the Archbishop* における Latour 神父や Vaillant 神父のような精神的開拓者でもない。しかし彼女は、*The Professor's House* における老年期の St. Peter や、*Shadows on the Rock*

(1931) の Euclide Auclair のように野心を持たない生き方に徹することもできない。Myra は *One of Ours* (1922) の Claude Wheeler や、*A Lost lady* (1923) における Mrs Forrester のように、野心は持つものの、自力で自己実現への道を開拓する能力が欠けている、迷えるアメリカ人であり、見通しの甘い開拓者の一人と言える。必然として彼女の野心はくじかれることになる。Myra の孤独は、自力で自己実現への道を開拓することはできないが諦めることもできない人間の失意と迷いを象徴していると考えられるのである。

また、Myra は「孤児」としてアメリカへ渡り、アメリカにおいて裕福な育ての親も情熱的な恋愛の末結ばれた配偶者も得ることができながら、「孤独」を抱き続ける。アメリカ文学における「孤児」は、母国から切り離されアメリカへと移民してきた開拓移民者たちの生き方を象徴する存在でもある。Myra の孤独には、アメリカで自己実現を目指しながら迷いと不安を抱え続ける開拓移民者たちの心理が象徴されているとも考えられる。

註

1. この観点について、Shunji Tsunoda は、“One conspicuous trait in *My Mortal Enemy* is that it presents dual opposing concept . . .” (1) と、また鵜沢文子は、「マイラはイエスの示した二面性を体現した」(69) と指摘している。Myra の性質も相反する要素で説明される。また、作品の構成自体も Part I と Part II は対照をなして配置されている。これらの対照性や対立要素の意味やそれらが象徴するものに焦点を当て、検証することで、Myra の人生観や謎の言葉の意味について新たな解釈を示すことが可能ではないかと考えられる。
2. Willa Cather, *My Mortal Enemy* (New York : Vintage Books, 1954) 3. 以下、本稿中の *My Mortal Enemy* からの引用はすべてこの版に拠る。
3. Milton Meltzer は、“It [this book] sold well, however, partly because it raised a debate over who the ‘mortal enemy’ was. Myra’s husband ? Or Myra herself ?” (122) と指摘する。この論点について例えば David Porter は、“Myra’s ‘my mortal enemy’ also fits the snakelike qualities she reveals . . .” (223) と論じる。
4. Cather の作品中の人物の「移動」に注目する Joseph Urgo は、Myra がさま

ざまな階級を経験する様子を、“Cather's text reveals that Myra Henshawe was lived the life of an American crucible.” (195) と表現する。

5. Nellie は、急速に発展している西部の町で、基盤のしっかりしていない実験的な大学に職を得たとだけ語り、そこが彼女にどれくらいの収入をもたらしてくれるのか、安定した雇用形態にあるのかどうかも語られることはない。実際の1910年代のアメリカにおいて、女性の大学教員の数や役割に注目してみると、たとえば Susan Boslego Carter のデータによると、1910年においてアメリカの四年制共学の私立大学では女性教員の比率は18.4％であり、四年制女子の私立大学になると75.2％とその比率は高い。また Caswell A. Ellis の1921年のデータによると担当する学問分野については「教養」と「家政学」において女性教員が多い。Nellie が勤める大学が公立か私立か、共学か女子大なのか、さらに彼女がどういった職位にあるのかといったことは全く語られないため、彼女の社会的地位や生活レベルの相場を測ることには限界がある。二十五歳の Nellie が Myra 世代の平均的な女性と違って独身であることは、当時として不自然なことではない。
6. この作品のロマンティシズムの傾向について、先行研究では例えば Merrill Maguire Skaggs は、Cather がリアリズムに限界を感じていた様子を “Cather associated realism with banal facts of everyday life” (90) と指摘している。
7. この Myra の傾向については、Harry B. Eichorn も、“With no love for the present, Myra turns away from human relations and finds comfort in thoughts of death, the past, and religion.” (233) と述べる。
8. Myra とノルマの類似については Harry B. Eichorn も、“Myra shares Norma's need to dominate her husband and her surroundings.” (242) と述べている。

Works Cited

Cather, Willa. *A Lost Lady.* London : Virago Press, 2006.
——. *Death Comes for the Archbishop.* London : Virago Press, 2007.
——. *My Ántonia.* New York : Oxford University Press, 2008.
——. *My Mortal Enemy.* New York : Vintage Books, 1954.
——. *One of Ours.* Lincoln : University of Nebraska Press, 2006.
——. *O Pioneers !.* New York : W.W. Norton & Company, 2008.
——. *Shadows on the Rock.* Lincoln : University of Nebraska Press, 2005.
——. *The Professor's House.* New York : Vintage Books, 1973.
Eichorn, Harry B. “A Falling Out With Love : *My Mortal Enemy.*” *Critical Essays*

on Willa Cather. Ed. John J. Murphy. Boston : G. K. Hall & Co., 1984.

Ichikawa, Sanki and Mine Takuji ed. *King Lear*. by William Shakespeare Tokyo : Kenkyusha, 1963.

Kronenberger, Louis. "Review of *My Mortal Enemy*." *Critical Essays on Willa Cather*. Ed. John J. Murphy. Boston : G. K. Hall & Co., 1984.

Meltzer, Milton. *Willa Cather : A Biography*. Minneapolis : Twenty-First Century Books, 2008.

Porter, David. *On the Divide*. Lincoln : University of Nebraska Press, 2008.

Skaggs, Merrill Maguire. *After the World Broke in Two : The Later Novels of Willa Cather*. Charlottesville and London : University Press of Virginia, 1990.

Tsunoda, Shunji. "A Study on Willa Cather's My Mortal Enemy—Friendship and Enmity : the Ambivalence in Marriage—."『熊本大学医療技術短期大学部紀要』12 (2002)：1-13.

Urgo, Joseph R. *Willa Cather and the Myth of American Migration*. Urbana and Chicago : University of Illinois Press, 1995.

ウエブスター、ジーン 『続あしながおじさん』松本恵子訳、新潮社、1961年。

鵜沢文子 「ウイラ・キャザー『わが終生の敵』のマイラ——見え隠れする動物たちをヒントに——」『白百合女子大学キリスト教文化研究論集』10 (2009)：63-75.

坂本辰朗 「戦間期のアメリカ合衆国における女性大学教員——1920年代における状況——」『広島大学高等教育研究開発センター大学論集』第39集 (2007)：89-107.

日本放送協会編 『歌劇ノルマ：オペラ対訳選書７』戸田幸策訳、日本放送協会、1971年。